

広告 企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

縄目の影が美しい わらのランプシェード

甲斐 陽一郎 宮崎／わら細工職人



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



1月17日、プレゼンテーションにて



商談会にて匠たちと

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやWEBメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをうけて行うエリ

また、商談会の終盤ではヒームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。宮崎県選出の匠、わら細工職人の甲斐陽一郎さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



キックオフ・セッションの様子

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけたくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意匠研究所）、川又俊明氏（クリエイティブプロデューサー）らをサポートメンバーに発注。

世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

「匠」のモノづくりを応援

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催: LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かして新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の



作品をプレゼンする甲斐さん



エリア・コンサルティングの様子

9月にエリア・コンサルティングに訪れた川又氏は、天井から吊り下げられて明かりが灯った試作品を見て「趣があり、想像していたよりもずっといい」と、評価。吊り型だけでなく、据え置き型の製作も勧めた。

光源は、市販のLED照明を取り寄せて試し、フードが透明なタイプに決めた。



甲斐 陽一郎
宮崎／わら細工職人

1979年五ヶ瀬町生まれ。大学卒業後に約10年間、小学校教諭として県内の小学校に勤務。その後、家業のわら細工に魅力を感じ、3代目として工房「たくぼ」を引き継ぐ。他分野のアーティストとの共同企画や、田植えやしめ縄作りを体験するワークショップにも取り組んでいる。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT



甲斐さんの作業風景

稲を大切に作る心 届ける温かな光

内側のLEDの光が周囲を照らすとともに、縄目の美しい影を映し出すことから、故郷の名にちなみ「HINOKAGE（ひのかげ）」と名付けた。

は確実に広がった。「うちの仕事としては斬新だった。多くの作品を見てきた妹の『これもものすごい』という反

応がうれしかった。これからずっと作り続けたい商品ができた」。工房「たくぼ」に、新たな定番が生まれた。



棚田での稲の収穫作業

「縄文土器に見られるように、わらで縄をつくる技術は大昔から使われていた。わらは衣食住だけでなく、生産や運搬の道具などとして生活全般で活用される貴重な資源だった。わらを大切にすることは、日本の伝統的な稲づくりを大切にすることを同じだと思う」。甲斐さんの製作は棚田での田植えから始まっている。

伝統の形を継承しながら、オリジナル製品作りにも意欲をみせ、県内外で個展や他分野のアーティストとの共同企画などを展開。「ワークショップのために、わらを持って都会を歩く時は、恥ずかしいが、少し誇らしくもある」と仕事に深い愛情を注ぐ。「生活の中から姿を消したわら細工を、再び取り入れてもらえるようなプロダクトを作りたい」と、今回の挑戦を決めた。

最初は、家内安全や五穀豊穡などの祈りをこめた願掛け飾りを発展させることを考えた。

「最初は、家内安全や五穀豊穡などの祈りをこめた願掛け飾りを発展させることを考えた。しかし、書類段階でサポートメンバーから「飾りよりも日用品を」と、再検討を求められた。生活の中で必要なものを考え続け、あまり触れなくて済み、わらの温



完成プロダクト「HINOKAGE」

もりや縄目の美しさを伝えられるランプシェードというアイデアにたどり着いた。